

# 羽衣物語

小川未明

青空文庫



昔むかしは、いまよりももっと、松まつの緑みどりが青あおく、砂すなの色いろも白しろく、日にっ  
 本の景色けしきは、美うつくしかったのでありましよう。

ちようど、いまから二千年ねんばかり前まえのことでありました。三保みほ  
 の松原まつばらの近ちかくに、一人ひとりの若い舟乗わかふなのりがすんでいました。ある朝あさ  
 のこと、東ひがしの空そらがやつとあかくなりはじめたころ、いつものごと  
 く舟ふねを出だそうと、海岸かいがんをさして、家いえを出でかけたのであります。

まだ、おちこちの森もりのすがたは、ぼんやりとして、あたり一面めん  
 の畑はたけには、白しろいもやがかかっていたけれど、早起はやおきのうぐいすや、

やまばとは、もうどこかでほがらかに鳴ないていました。そうして、あちらの空そらには、富士山ふじさんが、神々こうごうしく、くつきりと浮うかびあがつて見みえました。

これを仰あおぐと、若者わかものは、つつましげにえりを正ただして、手てを合あわせながら、

「どうぞ、今日きょうも私わたしのからだに、けが、さいなんなく、おかげで、しあわせにくらせますように。」と、いいました。

こう祈いのりをささげると、なんとなく心こころがすがすがしく、気きもちもはればれとして、しぜん、ふみ出だす足あしに力ちからが入はいりました。

このとき、どこからともなく、ぷんと松まつのにおいがしました。いつのまにか、松原まつばらへさしかかっていたのであります。木きの間あいだ

から、びようびようとして見える海の色、おだやかな波のうねり  
 ……。大海原は、まだよくねむりからさめきらぬもののように  
 した。

「おや。」といつて、若者はとつぜん、歩みをとめました。な  
 ぜなら、いくぶんもやのうすれかかった前の方に、ふしぎなもの  
 が目にとまったからです。なんだか、まぶしいものが、一本の松  
 の木の枝にかかっています。いままで見たこともないようなも  
 のです。

「尾の長い鳥かしらん。それにしても、なんときれいな、大きな  
 鳥だろう。」と、若者は、目をみはりました。

鳥がとまっているのなら、近づけば逃げるだろうと、ちゆうち

よしつつ、若者は、じつとようすをうかがいましたが、さらに、  
飛び立つけはいがなかったのです。そうして、風にひらひらと  
ゆれるのを見ると、うすい着物のようにも思われました。

「とにかく、いつて見とどけよう。」と、若者は用心しながら、一足、一足、それへ近づいたのです。

ひくくたれさがった松の枝にかかっているのは、はたして、かがやかしい、すきとおるような、女の着物でありました。はなれて見ると、まぶしい光をはなち、にじのかかったようでありました。かすみを切ったようにも思われるのでありました。

「いったい、この着物は、だれのものであろうか。」  
若者は、頭をかしげ、思案にくれました。

まつばらなかの松原の中は、しんとして、ときどき、小鳥ことりの鳴き声なごえが聞こえるくらいのもので、あたりを見まわしても、まったく人のいるような気きはしませんでした。

若者わかものは、はじめて見るものだけに、さわるのが恐ろしくもあれば、また、あまりきれいなので、手をつけては悪いような気きさえしました。ついに、もの珍めづらしさのあまり、勇気ゆうきを出して、自分の手てに取りと、つくづくとながめたのでした。

「これは、人間にんげんなどの着るものでない。天てん上じょう高く、わしかたかが、どこからかくわえてきて、ここへかけていったものだろう。なんにせよ、またと得えがたい、とうといものだ。こんな宝たからが手てに入はいるとは、なんと自分じぶんは幸しあわせものではないか。村むらの人ひとた

ちに見せたら、さぞ、うらやむことだろう。」と、若者は、ほくほく、よろこびました。

その着物をおしいたいで、いまやそこを立ち去ろうとしたときであります。うしろへ小さな足音がして、鈴をふるような、さわやかな声で、

「もし、もし。」と、呼びかけたものがありました。

おどろき、ふり向くと、若者は二度びつくりしました。なぜなら、そこには目のさめるような、美しい女の人が立っていました。

「それは、私の着物でございます。どうぞ、お返しくださいまし。」と、その美しい人はいいました。

## 二

その声こえを聞き、その姿すがたを見て、これが、この世よの人ひとであろうかと、若者わかものは、自分じぶんの目めをうたがわずにはいられませんでした。すぐには、返す言葉かえも出でなかつたのです。

「その着物きものを、どうぞお返かえしてくださいまし。」と、女おんなは重かさねていました。

若者わかものは、着物きものの持ち主ぬしがわかると、いままでの楽たのしかった夢ゆめが破やぶれて、がっかりしました。またと手てに入はいらぬ宝たからと思おもえば、なおさら惜おしかったのです。

わかもの  
若者は、

「せっかく、私が拾い<sup>わたしひろ</sup>ましたものを、どうぞ、捨て<sup>す</sup>たとあきらめなされて、これを私<sup>わたし</sup>にくださいませんか。」と、頭<sup>あたま</sup>を下<sup>さ</sup>げて頼<sup>たの</sup>みました。

こう聞<sup>き</sup>くと、女<sup>おんな</sup>は、ぱつちり目<sup>め</sup>をみはつて、さも、たまげたと  
いうようすで、

「なんとおつしやられます。その着<sup>きもの</sup>物を、どうしてあなたにさしあげられましょう。それを着<sup>き</sup>なくては、私<sup>わたし</sup>は空<sup>そら</sup>へ帰<sup>かえ</sup>ることができません。」と、答<sup>こた</sup>えました。

「や、や、それなら、あなたは、まさしく天<sup>てん</sup>女<sup>によ</sup>でいらつしやいますか。道理<sup>どうり</sup>で、人<sup>にんげん</sup>間<sup>かん</sup>にしては、あまりりっぱすぎると思<sup>おも</sup>いま

した。」と、急に若者は、ようすをあらためました。

知らぬ人から、こうして見られるのを、さも恥ずかしげに、天女は、ただうつ向いていました。

「話に聞く天女の羽衣とは、これでごぎいますか。」

「さようでごぎいます。」

たぐいなく美しいと思うのもそのはず、天女であつたかと、若者の感動は、しばらくしずまりませんでした。けれど、天女は、天にいるものとばかり信じたのを、どうしてこんなところへ降りたのであろうか、と聞かすにはいられませんでした。

「あなたは、どうしてこんなところへお降りになったのですか？」と、若者は天女に向かつて、たずねました。

天女は、こう問われると、ためらいながら顔をあげ、  
 「この景色があまりみごとなものですから、つい降りてみる気  
 になりました。」と、答えたのであります。

美しいものに見とれるのは、ひとり人間ばかりでなく、天に  
 すむ天女も、おなじであるのを知ると、自分がきれいな羽衣  
 をほしく思うのも、悪いことではないような気がして、若者は、  
 そのうえともしつこく、天女に向かつて頼みました。  
 「ごむりのお願いかもしれませんが、このきれいな着物を、どう  
 ぞ、私におあたえくださいまし。ながく我が家の宝にしたいと思  
 います。」

これを聞いて、天女はあきれたのであろう。が、しばらく言葉もありませんでした。

「どうしても、お許しになりませぬか。」と、若者がいうと、天女の顔には、悲しみの色がただよって、ついに口をひらきました。

「その着物を着なくては、二度と天へは帰れません。人間には役にたたぬものですが、天女には、なくてはならぬ着物でございます。」と、うつぶきました。

若者は、片言も聞きもらすまいと、耳をかたむけていました。天女が、羽衣を着なければ天に帰れぬといったので、これはなんたる自分にとって、しあわせなことであらう。そうす

れば、この美しい人を村へつれもどつて、いつまでも、とめておくことができると思つたのでした。

「そう聞けば、なおさら、この着物をお返しすることはできません。」

「それはまた、どうしたことでしょうか。」

天女は、おどろいて顔を上げ、目をぱちりとひらいて、若者を見ました。

「羽衣より、あなたのほうが、もつともつと美しいのであります。羽衣がなければ、天へ帰れぬとお聞きしては、あなたを、いつまでもおとめしたいばかりに、羽衣をお返しすることができなくなりました。」と、若者は正直に申しました。

てんによ  
天女のからだは、恐ろしさのあまりふるえ、顔色は青ざめて見えました。これを見ると、若者は、こういつたのも、天女のような美しい人のそばにいたいためであり、少しも悪い心からではないのだ。どうか、それを天女にさとつてもらいたいと思いましたが、

「天女さま、こう申しますのも、お恥ずかしい話ながら、私はまだ、ひとり者なのでございます。もし、あなたさえご承知になつて、私の妻におなりくださるならば、あなたのために、この命もささげます。ただ、人間の身として、天上のあなたをお慕いするのは、つつしみのないことかもしれませぬけれど、美しいものを愛する心に、神も人もかわりないならば、どうぞ、私

の願ねがいをお聞きき入いれくださいますし。」と、ねんごろにうつたえま  
した。

天てん女にょは、にがりけのない若わか者ものの心こころに感かん動どうするとともに、  
自じ分ぶんにも落おち度どがあつたのをさとりました。こんなことになるの  
も、自じ分ぶんの軽けい率そつからであつた。うかうかと、地ち上じょうへ下おりさえ  
しなければ、何なに事ごともなかつたと、後こう悔かいしました。

## 三

富ふ士じ山さんは紫むらさき色いろをおび、ゆつたりと長ながくすそを引ひいていまし  
た。その広ひろいすそ野ののふちを、青あお黒くろい色いろの海うみが、うねりをあげ、

そして、もやのかかる松林まつばやしや、白い砂すなの浜辺はまべは、浮き織りうきおりの模様もようのように見えるので、さすがに天女てんによも、しばらくはわれを忘れて、見とれずにはいられませんでした。

天女てんによは、それが、こうしてわざわいを招くとも知らず、袂たもとをひるがえすと、さつさとくじやくの舞まうように、人間にんげんのいぬのを幸さいわいに、松原まつばらへ降りたのであります。

すると、しめつた土つちのさわやかさ、水すい晶しょうをくだく海うみの水みず、  
 天女てんによは、心こころいくばかりそれに親したしまんものと、足あしにまつわる羽は衣えをぬいで松まつの枝えだへかけ、はだしのまま、なぎさの方ほうへ走はしつたのでした。

そして、冷つめたい水みずに足あしをひたしながら、ささやきつつ、寄よせて

は返すさぎ波を相手としてたわむれ、いつしか、時のたつのを忘れていたのでありました。そのうち、東の空がほんのりと赤く色づきました。それを見て、天女は、はじめて朝日の上がらぬうち、天へ帰らなければならぬと気づき、羽衣をとり、松原へ引き返したのです。

ところが、その大事な羽衣は、いつのまにか、人間の手に入っていました。このとき、若者は、

「これほどお願いしても、まだなんともおつしやらぬのは、私の心がおわかりにならぬからでございますか。」と、悲しそうにいいました。これを聞くと天女は、

「いえ、なんで、わからぬことがございましょう。天と地とわか

れていても、情けにかわりもなければ、また善し悪しや、喜びや  
悲しみにも、ちがいはないのでございますものを。」と、答えた  
のでした。

「それなら、なぜ、私の願いを聞いてはくありませんか。」と、  
若者は、いきいきとした目を天女に向けました。天女はた

めらいながら、

「空にいる私は、まったく、地上のくらしを知らないの  
でございます。」といいました。

「さつき、情けにかわりはないと、おっしゃったではありません  
か。」

「そう申しましたのも、あなたの真心がよくわかり、うれしく

思おもつたからです。そう思おもえばこそ、なおさら、あなたを幸しあわせにし  
なければなりません。まったく、この地ち上じょうのくらしを知らぬ私わたし  
に、なんで、あなたを幸しあわせにすることができましよう。」  
「いえ、いっしょにいてさえくだされば、それで私わたしは満まん足ぞくしま  
す。またそれが、どれだけ私わたしを力ちからづけるかしれません。私わたしは、山やま  
へいって薪たきぎもとつてくれれば、海うみへ出でて魚さかなもとつてきます。すこし  
もあなたに、ご不ふ自由じゆうをばさせません。」と、若わか者ものは、あくま  
で思おもいを通とおそうとしました。

あわれな天てん女にょは、なやみにたえかねてか、顔かおには花はなの色いろがあ  
せ、青あお白しろく、急きゆうに姿すがたがやつれて見みえました。

これを見みると、若わか者ものは、天てん女にょをいたいたしく感かんじたのでし

た。そして、なんとなく、じつとしていられなくなりました。

「てんによ天女さま、わたしわる私が悪いのでごさいます。わがままをいつて、あなたをくる苦しめてもう申しわけがありません。どうぞ、ゆるお許してくださいまし。」と、あたま頭をひくくたれました。

すると、てんによ天女は、あたまあ頭を上げて、

「にんげん人間はにんげん人間のつとめをはたして、とうといのであります。

もし、だれでもそのみち道をあやまるなら、どんな不幸ふこうが起おこらぬともかぎりません。それゆえ、はやわたしそら早く私を空へ返してください。」と、めなみだ目に涙をう浮かべていいました。

わかもの若者は、てんによ天女のどこまでもやさしく、ただ正しいのにかんしん感心しました。そして、じぶん自分がわる悪かったのをさとると、こうしてた立って

いるのさえ、なんとなく気恥きはずかしくなつたのです。

「あなたは、天てんにいらして、なにをなさつていられますか。」と、  
若わか者ものは聞ききました。

「私わたしは、神かみさまにお仕つかえしています。雲くもの上うえにて、五色しきの機はたを織おります。また、神かみさまのお使つかいで、ときどき、星ほしの世界せかいから星ほしの世界せかいへと、飛とびまわることもあります。」と、天てん女によは答こたえまし  
た。

若わか者ものは、ていねいに羽衣はごろもを天女てんによの前まえへさし出だしながら、

「どうぞ、これをお受うけ取りとくださいまし。ついては、こんなお願ねがいをするのも、まことにあつかましい話はなしですが、せつかくのお名残なごりに、せめていつまでも、美うつくしい、正ただしいあなたに、お目めにか

かつた思い<sup>おも</sup>出<sup>で</sup>となるような、なにかおしるしをいただきたくないのですが、かなわぬ願<sup>ねが</sup>いでございましょうか。」

「私<sup>わたし</sup>の持<sup>も</sup>ちますものは、すべて、この羽衣<sup>はごろも</sup>のように、にじやかすみを織<sup>お</sup>つて作<sup>つく</sup>つたものだけに、人間<sup>にんげん</sup>の手<sup>て</sup>にわたれば、いつまでも、形<sup>かたち</sup>となつて残<sup>のこ</sup>つたことはありません。下界<sup>げかい</sup>にすさぶあらしや雨<sup>あめ</sup>にさらされるなら、たちまち、破<sup>やぶ</sup>れてしまふでしょう。しかし、あなたのような正<sup>しょうじき</sup>直<sup>ちか</sup>な方<sup>かた</sup>には、私<sup>わたし</sup>のおあたえしたものは、いつまでも心<sup>こころ</sup>のうちへ残<sup>のこ</sup>り、あなたの一<sup>しょう</sup>生<sup>せい</sup>を、楽<sup>たの</sup>しくおくらしませることができましよう。」といたしました。

「まあ、それは、どんなとうとい品<sup>しな</sup>でございませうか。」

「いえ、形<sup>かたち</sup>のあるものではございませぬ。いまも申<sup>もう</sup>しますように、

形かたちのあるものは、いつか、やぶれくずれるものであります。形かたちがなくなつて、心こころに残るものこそ、いつまでもこわれることのない宝たからであります。」

「と、申もうします宝たからとは？」

「人にんげん間の考かんがえでは、絵えにすら書かけな天てん女の舞まいを、ごらんに入いれたいと思おもいます。」

こう聞きくと、若わか者の顔かおは、急きゆうにはれられしくなつて、につこり笑わらい、

「見みたものは、この世よの心しん配ぱいや、年としを忘わすれると、昔むかし話ばなしに聞きいたが、まだだれも見みたと聞きかぬ天てん女の舞まいでございますか。それれはありがたい。」といいました。

このとき、たちまち、どこからともなく起おこる笛ふえの聲こえ、それと相あい和わす太鼓たいこの音おと、若わか者ものは、おもわず頭あたまをめぐらして、その美うつくしい音色ねいろにうっとりとして聞きほれました。

見みれば、もう天女てんによの姿すがたは、空そらへと浮うかんでいました。若わか者もの

が、「あれよ。」というまに、天女てんによの長ながい袂たもとはひるがえつて、

若わか者もののかしらの上うへへたれさがり、そのはしが、手てでとらえられ

そうなどころまでくると、ふたたび、まき上あがる雲くものように、高たか

くはなれて、音おん楽がくも急きゆう調うちよう子しにはずみ、それといつしよに、

しばらく、はげしく舞まいくるつたのであるが、いつしか、しだい

に高たかく高たかく、そのまま姿すがたは遠とおく小ちいさくなり、ついに、かすみの奥お

くふか  
深く消え去つてしまつたのであります。

いつのまにか、美しい音楽の音もやんで、ただ、そよそよと  
吹く朝風のうちに、音楽の音が、いつまでもただよつていた  
のであります。

はまべ すな うえ  
浜辺の砂の上に、じつとしてすわつていた若者は、やつと夢  
からさめたように立ち上がり、方々を見まわしましたけれど、  
もうどこにも、天女の姿もなければ、羽衣のかけもありませ  
んでした。

ひろびろ  
そして、広々とした海原と、青い松林と、いつにかわ  
らぬ富士山があるばかりでした。若者は、その後、長い一生を  
正しく、楽しく送ることができました。

かれは、仕事につかれたときなど、いつも大空を仰いで、天  
女を思い出しました。すると、ふしぎや、天女は雲の上から、  
星のような目で下界を見つめて、なぐさめ、はげましてくれたの  
であります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕の通るみち」南北書園

1947（昭和22）年2月

初出：「コクミン一年生」

1946（昭和21）年2、3月

「コクミン二年生」

1946（昭和21）年4月

※表題は底本では、「羽衣物語《はごろもものがたり》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 羽衣物語

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>